



＝ いまの憲法が私たちの暮らしを護る ＝

“ノーベル平和賞候補になれない日本の報道”その実態

ノルウェーのノーベル賞委員会は10月8日、フイリピン人のレツサ氏とロシアのムラトフ氏にノーベル平和賞を授与すると発表した。レツサ氏はドゥテルテ政権からの露骨な圧力や逮捕にも関わらずジャーナリストとして、「表現の自由が民主主義に不可欠」と訴えている。ロシアでは数少ない独立系メディアのムラトフ編集長も同様にプーチン政権の強圧的な暗部を暴き、同僚6人が暗殺されるも「私の手柄ではなく表現の自由のために戦った同僚たちの功績だ」と述べている。8年ぶりとなるジャーナリストへの平和賞授与は、権力の乱用やウソなどから人々を守るジャーナリズムがまさに今国際社会そして世界ランキング67位の日本に求められていることの証となった。

そこで国内の実態を考えてみる。政権の乱用やウソが公然とまかり通りそれを暴ききれない報道の姿勢が国民のやりきれない停滯感を強めている。昨年の長崎原爆の日、現地首相会見で記者団の質問に応じた安倍元首相の手にあつた原稿には、なんとすでに記者の質問とその回答が記されていた。詳しくは当紙2010月号18年にも及ぶ安倍・菅政権に対峙すべき大手報道各社は、記者クラブを核として時の政権にまるごと飲み込まれつつ、モリ・カケ・桜、広島1・5億円の「国民の知る権利」の期待を果たすことなくその馴れ合い的体質を維持し続けている。72年6月佐藤首相



記者が一人もない会場で退陣会見をする佐藤首相 mainichi.jp

は退陣記者会見で「新聞は嫌いだ、出る」とNHKテレビカメラのみで会見を終えた。この時一斉に退室した記者団には政権が嫌がることを聞き出そうする熱意が満ちておりジャーナリストと政権との間に緊張があつた。いまの記者会見は政権側の主催と見間違えるほどに政権の言い分をそのまま流す全国紙、テレビ報道が常態化している。ここにきて二氏の受賞は、日本の「知る権利」の不毛さを痛感させる。国民は政権そして報道の両者をしっかりと監視し続けなければとつくづく思う。

今月の予定です

皆さん 気軽に参加ください

11月7日(日) 13:30～16:30

DMD 視聴と意見交換
アイヌ民族は北の大地の先住民！
「アイヌの今を知り考える」
南部梅郷公民館 南地域九条の会

11月9日(火) 16:00～17:00

9の日 行動
九条通信配布・ボードでアピール
川間駅 北口 野田・九条の会

11月13日(土) 13:30～16:00

野田・九条の会 11月例会
意見交換「台湾海峡問題と岸田首相の外交方針」
中央公民館 講座室 野田・九条の会

11月19日(金) 13:30～15:30

テレトーク ちょっと豪華な Google meet
「おしゃべりカフェ」
《PC, スマホでの申込み先》
n.katagiri88@gmail.com(片側)
野田・九条の会

11月21日(日) 12:30～16:30

平和のつどい2021「映画と講演のつどい」 詳細は右欄で
興風会館 平和のつどい・のだ2021実行委員会

12月5日(日) 13:30～16:40

DMD 視聴と意見交換 僕らはあの事件からまだ何も学んでない
森達也監督作品「A」
南部梅郷公民館 南地域九条の会

平和のつどい 2021 ≡ 映画と講演のつどい ≡

主催 平和のつどい・のだ2021 実行委員会



三上智恵監督

I部 映画

沖縄スパイ戦史

II部 講演

日本の縮図 沖縄

●講師 三上智恵監督

11月21日(日)

興風会館(野田市野田250)

12:00 開場

12:30 I部 映画

15:00 II部 講演(Web配信します。有料 500円)

16:30 終了

協力券 1,000円(18歳以下無料)

連絡先 ☎ 04-7129-4297(田口)

戦後70年以上語られなかった陸軍中野学校の秘密戦士として今につづく沖縄の現状、三上監督が過去と現在をつなぎ未来の沖縄と日本の姿を問ひかけます。三上監督は沖縄から来野。めったにない機会です。是非お出かけください。

”自公の放蕩政治” 取り替える責任は国民にある

🔄 足踏み状態がつづく

政権交代があったのは'12年末、以降9年にも及ぶ自公政権は日本社会を停滞させ、大多数の国民を困惑また苦境に追い詰めてきた。特にコロナ禍は対応の誤りで無能をさらけ出し、必要とされる検査、隔離療養を制限したことにより膨大な死者と飲食業へ経済的犠牲を強いた。政府の責務は制約なきPCR検査と公的病床・隔離療養の確保であり既存の法的措置で行えるのに、予想される第六波への政策変更する姿は見えただらだらと無策が続く。さらに消費税については、経済界の要求でさらに税率上げを目論むが、得た税収は法人減税による減収の穴埋めであって国民への転嫁にほかならない。国民は足踏みをさせられ、ただただ疲れて苦しみがつづく。

🔄 新政権でも変わらない

先月岸田首相が述べた所信表明演説は前言を翻す場となっていた。国民のモヤモヤ感情が潜在するモリ・カケ・桜そして広島1.5億円疑惑の解明拒否は国民を諦めさせようとする理不尽さを感じさせる。

生活の向上策では「成長と分配」というが野党の「分配が先」が妥当で、成長後のトリクルダウンは有りえないことを国民はすでに知っている。おわりの項では改憲を取り上げ「与野党の枠を超え建設的な意見を……」としたが、世論調査を見れば多くの国民はいま改憲の議論が必要と考えていない。憲法

改正の議論は多くの国民が望むものですべきで、必要な論点を見出せない体質は相変わらずだ。

🔄 過去の事実から考える

80年前の戦時体制で臣民といわれた国民は、自由や情報を国家から制限され軍国一色に染められていた。岸田首相はモリ・カケほかの疑惑解明に前言を翻しウソと隠蔽をこれからも続けると公言している。軍国から76年を経るも民主主義の基本である**情報公開、知る権利**を軽んじてはばからない。この政権を取り替える責任はわたしたちにある。

あの時に似てきたと言われる今、「平和のつどい・2021」で、あの時に先人が体験した事実をたどり人権、主権、平和を探る。さらに今に続く沖縄の問題からも、映画「沖縄スパイ戦史」を観て三上監督とのトークで考える。

平和のつどい 2021

ウソと隠蔽が悲惨な結末として現れた先の戦争。「こうして80年前の日本の社会と国民生活は『軍国・戦時体制』の一色に染まった」の展示では「赤ちゃんの産着」にナンキンカンラクバンザイそして

鈴なり提灯。祝う庶民の姿には何らの悪意もためらいもありません。

何がそうさせたかを過去が私たちに教えている。



産着（ナンキンカンラクバンザイと鈴なり提灯の絵柄）

言葉

吉田妙子

昨年9月の9条通信6月号で「私たちはコロナ禍という苦難の中で何を学ぶのか、又国はこの有事に国民を守る強い意志とその能力があるのか問われている。」と書いた。果たしてその問いかけに国はどう答えて来たのか、一つの確かな事実として「自宅療養」という実態とはかけ離れた言葉が使われた。

現実は一切の医療を受けられず自宅に留め置かれ多くの方々がなくなった自宅放置であったのにメディアも使い続けた。真実を覆い隠す言葉が何の検証もされず社会に流される。政治家の言葉が不誠実となり、空疎なものとなった社会。民主主義の危機が切実に叫ばれる社会となった。だからこそ胸に刻み伝え続けなければならない言葉がある。

政治は善を迫及して人間を尊重するのが本質
政治評論家 森田実

国民の知る権利とは何のためにあるのか。主権者である国民が政府の政策に間違いがないことを検証し納得するためにある。

安全のために国民個人の自由が制限される場面があることは認めるとしても、表現の自由やその前提となる知る権利は、国民をして主権者であらしめる為の権利であり、民主主義にとって譲ることの出来ない前提。
柳沢協二

自由はある日突然なくなるものではない。それは目立たない形で徐々に蝕まれ、気が付いた時にはすべてが失われている。
宮澤喜一元首相

コロナを理由に自由の制限が当然のごとく語られるようになり社会も受け入れつつある中、言葉に不誠実な政治(家)には何事にも用心深く慎重に。そして言葉の裏に隠された本音を見抜く力を持ちたい。